

銀幕の果てに



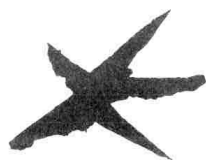
つかこうへい

Shin

銀幕の果てに



つかこうへい



銀幕の果てに^{ぎんまくは}

一九九四年 三月二十五日 第一刷発行

著 者 つかこうへい

発行者 若 菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二五—一〇

郵便番号 一〇一—五〇

編集部 (〇三) 三二三〇—六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三二三〇—六三九三

制作部 (〇三) 三二三〇—六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、本社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

第四章
第三章
第二章
第一章
序

原 兇
雨
杉並区高円寺
森
銀幕

105
90
61
33
9

第五章

撮影所

116

第六章

第七スタジオ

131

第七章

ホテル

151

第八章

内閣官房長官
村雨大吾

174

第九章

氷の世界

194

第十章

曼陀羅 I

213

第十一章

シエルブルーの雨傘

236

第十二章

鎌倉

257

第十三章

『犯して東京』

267

第十四章

神楽坂純情シネマ

296

第十五章

青森県三沢

313

第十六章

アルプス

332

第十七章

曼陀羅 II

347

第十八章

ジャンボ I

373

第十九章

神々の流刑地

399

第二十章

ジャンボ II

418

第二十一章

喝采

436

装丁・装画

松永真

銀幕の果てに

この物語は、時代も事実もすべて超越したストーリーです。

序 銀幕

昭和五十年十二月二十四日。

クリスマススイブ。

凍てつくような冷たい空には、無数の星がまたたいていた。

その星の果て、

冥王星五千億光年の彼方、青白い氷と漆黒の闇の中に、菩薩はおわしました。

宙天に座る菩薩の目はつり上がり、口は耳まで裂けていた。

「このハサミは一体何をするものぞ!？」

菩薩は、青き地球より放たれ、今まさにその喉元に突き刺さらんとする銀色に光るハサミを睨みつけて言った。

「教えよ、女!!」

菩薩の怒りは、白い惑星たちの光を奪い、真空の闇をおののかせた。

「……………」

が、一面の銀河を背に、白馬に跨り、髪をなびかせるその女は答えなかった。

「クソー!」

菩薩は、全知全能の自分が知りえぬ謎があることが、何より許せなかった。

「われはおまえたちの創造主なるぞ。言え！」

菩薩の怒りは、空間をきしませ、ねじ切るほどであった。

「人はわれらを敬い、ひれ伏すことをせず、われに挑もうというのか!!」

「……はい」

白馬の女は、また真っ赤な唇に不敵な笑みを浮かべうなずいた。

「よう言うた!!」

菩薩の髪は逆立ち、背後の氷は岩に碎ける滝のように弾け飛んだ。

そして、飛ぶ銀色のハサミが菩薩の喉仏に突き刺さろうとしたその刹那、天を指し示し決して動かすことのなかったその右手で掴み取り、

「おろかなり、人はついに滅ぶか!!」

冥王星と対角をなす、青き地球に向けて投げ返された。

白馬の女は、その美しい眉をくもらせ、哀しげにハサミの飛ぶ方向を見た。

同時刻、千代田区霞が関一―三―一、通産省。

午後十時になっても、その灰色の建物には煌々と明かりが灯っていた。

「さて諸君」

窓際の広いデスクに座る課長の高原豊造が、両手を大きく広げた。

「ショウタイムの始まりだ」

机の前に座っていた連中が、いっせいに手を止め、高原を見た。高原は満足げにうなずくと、
「秋山君、例のシャンデリアの名前は決まったかね」

「いや、まだです」

秋山と呼ばれた男が、弾かれたように椅子から立ち上がった。そのあわてふためいた無様な様子に、フロアのあちこちからクスクス笑う声が聞こえた。高原はその声にニンマリし、

「ほらキミ、立ち上がるたびに頭を押さえるから、すぐ、カツラってわかつちゃうんだよ」

「すっ、すいません」

あわててペコペコ頭を下げた秋山は、もう汗びっしょりになっている。

「すいませんって言われても困るんだよ。僕がハゲてんじゃないんだから」

高原のおどけた物言いに、フロア中がドッと笑った。

「しかし、そんなにハゲててまだじゃ困るじゃないか」

「いい名前が思いつかなくて」

「フン。あんなバチあたりなもん、いいも悪いもないだろう」

「申し訳ありません」

「君があやまってもしょうがないんだよ。君がつくつたんじゃないんだから」

「すっ、すいません」

「あやまるなって!!」

高原はバンと机を叩き、秋山を睨みつけた。

「まだ名前を決めてないとなると、君は今日もまた残業だな」

「……あっ、あの」

秋山の唇はカラカラにかわいている。

「君ぐらいハゲてたら、クリスマススイブに帰ったって待っている女もないだろう。ハハハ、これ面白いな。みんな、これ面白いだろ」

「ハハハハ」

フロアの笑いとはまらない。

「うん、面白いね、この言い方。『君ぐらいハゲてたら』か、ハハハ」

「課長、ひどいですよ、そんな言い方」

手を口にあて、笑いをかみ殺した春川瞳が、その美しい目で軽く睨んだ。

「だってほんとのことじゃないか」

「でも、ひどすぎますわ」

高原は、わざとらしく背をかがめて秋山を見下ろし、

「しかし、秋山君。それだけハゲてて、わが栄光の東大法学部を首席で卒業するなんて、並大抵のことじゃなかったろう」

「はっ、はい」

「どうして大蔵省にいなかったのかね」

「……………」

「春川君がこっちに來たからかね」

「いえ、違います」

首を振る秋山の顔が真っ赤になった。高原はチラと舌をなめ、

「おっ、凶星のようだね」

「ちっ、違います」

「だったら、ゆでダコみたいに赤くなることはないだろう」

「すっ、すいません」

「あやまるな!!」

高原はさもいやそうに口を歪めた。フロアにまた、冷やかな笑いが拡がっていく。

秋山は、耳まで赤くなり、ブルブル震えていた。

「時に秋山君、そのシークレットブーツで何センチ底が上がるのかね」

「あつ、あの」

「どこで売ってるの、そんなの。通信販売か。ハハハ」

「……ひどい」

「おつ、そんなにかばうところを見ると、春川君も秋山君にベタ惚れっていうわけか。二人はもうできてんだ、ハハハ」

「やっ、やめてください」

春川瞳は両手で顔を隠し、給湯室に逃げていった。

笑いはまた洪水のように大きく拡がった。

「まあ秋山君、諦めたまえ、高嶺の花だよ」

「はい、わかってます」

「わかってますにゃあ、まいったなあ」

高原は落語家のそれのように、おどけて自分の額をたたいた。

同午後十一時、新宿。

新宿駅東口、アルタビルの大画面が明日は大雪になるという予報を映していた。

秋山協二郎は、買ったばかりのバーバリーのトレンチコートを引きずるようにして歌舞伎町に向かっていた。

あちこちでわめく酔っぱらいの息も白い。

通りに入ると、黄色や赤や青のケバケバしいネオンの陰から、ポン引きたちが寄って来た。払っても、払っても袖を引き、そのしつこさに小柄な秋山は引きずり倒されそうだった。

「どう、お兄さん、七千円ポッキリだけど」

「……………」

「チッ、かつこつけんじゃないよ、このチビが」

「……………」

風は、頬をちぎるように冷たい。

ファッションマッサージ『愛の旅路』は、コマ劇場裏の細い路地を入ったところにあつた。

人がひとり通るだけでいっぱいになる黄色い狭い階段を上がり、四階のピンクのドアを開けると、赤い蝶ネクタイをして、顔の浅黒いマレーシア人のボーイがいた。胸の名札に『チム』と名が書いてある。秋山はチムに五千円札を渡し、6番と書かれた小さな覗き穴の前に立った。

そっと覗き込むと、そこにケバケバしいピンク色のベッドが置かれ、その上にナオミがデんと座っていた。

「……………」

ブラジャーとパンティーだけの姿だが、浅黒い肉塊とでもいうような、何の色気もない身体だった。短い手足は丸太のようで、余った腹の肉はたくましさを感じさせる。

ナオミは覗かれているのを知り、さっそくポーズを取ってきた。胸をそらし、腕をうなじにまわし、そのどぎつく化粧した真っ白い顔で笑った。滑稽で、悲しい顔だった。上目づかいに覗き穴を見て、ブラジャーのホックをはずすしぐさをする。

「……………」

秋山は6番の覗き穴から離れ、待っていたチムに言った。